

台湾先史時代の貝塚*

国分直一

On the Prehistoric Shell Mound of Formosa*

By

Naoichi KOKUBU

The Taipeh basin in the northern corner of the island occupies an area of about 150 sq. km and is less than 10 m high above sea level. It is triangular in outline separated from the surrounding table land hill with distinct topographical boundary. A submergence of considerable amount of land can be inferred from lithological nature of basin bed and its marine fossil layers as well as from the shell mound from which blackish water shells were found. Seven shell mounds are known in and around Taipeh basin, especially among them Ensuan shell mound is the most well-known one. The *Corbicula maxima* a blackish water shell which seems to have disappeared from the basin district, is the most popular species found from the shell mounds of the Taipeh basin.

The extensive coastal plain of the western side is attributed to a continuous rising of recent years. In the coastal range extending to more than 65 km between the Hou-liu river and the Ta-tu river, five shell mounds are known.

In the coastal area, about 70 km long and 12~15 km wide, from the Tsêng-wên river to the Shimo Tamsui river, alot of prehistoric sites were found, among which around 20 sites with shell mounds are known.

It is especially interesting that several shell mounds are found around the environment of the sand dune platform of Tainan area formed on the old off-shore bar.

Turning to the eastern side of the island, it is discernible that the eastern, very steep and precipitous cliff is naturally much simpler than the western marshy shore with a broad bar in front.

This is the reason why the shell mounds are rarely found in the eastern shore district.

With regard to the Pescadore Islands, I have already reported the Liang-wên-

* 水産講習所研究業績 第362号, 1962年1月18日 受理.
Contribution from the Shimonoseki College of Fisheries, No. 362.
Received Jan. 18, 1962.

chiang site. But in addition to that, according to Prof. SUNG-WEN-TSON, a large number of shell mounds are said to have been found in those islands.

台湾島への文化渡来の前提条件として、台湾島の地理学的成因ならびに地史について考えておく必要があると思う。台湾島が地質学的最近の時代において如何なる成因と経過をもったか。この問題について、早坂一郎博士が考察を示されている¹⁾。博士の所説を要約すると次の如くである。中国大陸との間に陸棲動物の移動が行われたと考えられる時代がある。化石犀はおそらくその頃に大陸から移住したものの残片であろうと考えられる。然しその後、新しい地質時代において台湾島はやや急に沈降をはじめた。この沈降の途中特にその終の頃になって地盤の状態や沈降の速度が造礁に適するようになった。礫層に覆われた table-land はちようどこの頃に浅い海水面下で出来つつあった。沈降が更に継続しつつある間に海底なる将来の table-land の表面には引つづき砂土の沈積がおこった。然して pleistocene 世にはいって、大氷期の出現となった。もしも DALY 氏のいわゆる Glacial Control Hypothesis を承認すべきものとするなら、台湾においても水位と温度との低下によって珊瑚蟲の死滅を来し、造礁の作用は断絶するに至ったと考えられる。高雄の東方鳳山地方から島の南端鶯鑿鼻方面迄にわたって分布する珊瑚礁は寿山、岡山等のものよりは遙かに若いものと考えられる。これらはおそらく、氷河の融解によって引きおこされた水位の上昇に伴ったものであろうと考えられる。この最後の隆起期に台湾海峡およびその周辺のある地方に火山岩の噴出がおこった。陸地の上昇の結果として当然河川の活動は著しくその勢力を加えた。これらの河川はいわゆる Consequent valley の形をとり、西方海岸へ向けて急流し、本来一続きであった Table-land を切断して、北から南へ一列に配列する数個の断片としてしまった。大安溪、大甲溪、大肚溪、濁水溪等は最も若々しい Consequent valley である。東海岸地方の極めて若い河谷も亦この隆起によって活動が加えられたもので、矢張り Consequent valley の発達が見られる。これらの急斜せる Consequent valley によって海岸では堆積上昇が尚継続されつつあるというのである。

上昇作用は歴史時代における近々2~3世紀にあっても西部海岸においてはかなり著しい進捗を見せ、海岸地形の変化の上に与えた影響には著しいものが考えられる。

台湾においては旧石器人類の登場については全く何んらの証跡もあげられていない。

現在比較的古い遺跡と考えられる遺跡にしても海岸の沖積平野地方、特に河岸、或いは Table-land の上、或いは台地と沖積平地との連接地区等において見出される新石器時代以降の遺跡である。

先史時代住民が海岸地方に定着した当時に比べると少くとも西部地方においては海岸地形の上にかんがりの変化があったものと考えられる。

その事情を最もよく語っているのは貝塚の分布の状況であるといえよう。

台湾先史時代の貝塚はどのような分布を示していたか、その分布を通して先史時代の地形をどの程度に追跡出来るものであるか。貝塚時代にはいかなる貝が食用されていたか、貝塚の語る文化内容はいかなるものであったかについて、明かにしつつ先史地形の状況を考えて見ようとするのが本稿の目的である。

二

I 基隆湾岸の貝塚

台湾の北辺海岸は西岸の砂泥質の海浜に比して岩礁性の海岸を形成している点で著しい相違がある。先史貝塚が西海岸に比して、北辺海岸において稀にしか発見されない理由がそこに考えられる。

台湾先史時代の貝塚

基隆湾岸において、僅少な貝塚が発見されているに過ぎない。然もそれは比較的近代の貝塚と見られるものである。基隆駅の東方、社寮島に近い大沙湾の海辺に東から西へA、B、C、D 4カ所の小貝塚が汀線から10m、海岸道路下の崖面に発見された。断面を見ると最大幅2m、厚さ30cm程度の残跡に過ぎない。それらは表土の厚さ、遺物包含の状況から見て、明らかに同時代に形成された貝塚であると考えられる。

その中の比較的大きいAとBを金関丈夫博士、金関恕氏(現天理大講師)と共に発掘調査した。(1943年9月)

A、Bいずれにおいても表土の厚さは70cm貝層の、厚さは30cm、奥行はいずれも1m弱の極めて類似した堆積と残存状況を示しているが、貝の種類はAは岩礁性の巻貝を主としているに対し、Bは牡蠣を主体としていた。遺物について見るに、表土および貝層中に包含されていた土器はいずれも近代中国陶片にして釉薬を有せぬ暗褐色の陶片、飴色もしくは暗褐色の釉薬を有する陶片のみであるが、Aの貝層底の岩盤の上から1片の薄手灰褐色のケタガラン族の土器に酷似する土器片が得られた。同様の土器片はバックグラウンドをなす旭ヶ丘丘陵の丘陵縁においても得られる。大沙湾の小貝塚はケタガラン族がこの海辺地帯から去った後にケタガラン系土器片の散布する遺跡の上に漢民が占拠するようになった極めて初期に形成されたものでなかろうかと思っている。従って極めて近世に属するものと考えている。

II 台北盆地

(1) 円山貝塚 第三紀の砂岩から成る標高35.6mの小丘をめぐって、丘背および丘麓に遺跡がある。遺跡は基隆河を隔てて台湾神社のあった剣潭山に相對している。大部分は動物園になっているが、東北部は遊園地となっている。主要貝塚は小丘の西側および北側山麓にある。臨濟寺境内のものは日本時代には史蹟として指定されていた。丹啓之助博士によれば主要貝塚は高さ3~4m、長さ100m、幅1~3mあると報告されている。戦後1953年冬と1954年春に同貝塚は台湾大学の人類考古学教室の李济教授らによって発掘調査された。その結果円山貝塚は2層に区分されることが明らかにされた。繩紋文を有する土器は砂泥質の下層から、典型的な円山文化即ち紅色の着色を有する粗い褐色の土器、有肩石斧、石庵丁、パツ型石器等は上層から得られた。下層が美しい砂泥質から成るに対して、上層は多量の鹹水産の貝と獣骨を含んでいるとされる。

台湾大学人類考古学教室の李济教授らによる発掘の成果についての詳細は不明であるし、貝の品種について如何なる同定がえられたかも不明である。貝の品種については従来報告されているものによると次の如くである。

原田正彦氏は円山貝塚から塩吹貝 *Maetra veneriformis* REEVE をたとされ、その測定値をあげている²⁾

佐藤伝蔵氏は円山貝塚から *Corbicula* および *Cytherea* を得、原田正彦氏の報じた塩吹貝が1例もえられなかったという³⁾。

宮原敦教授は同貝塚より *Corbicula nipponensis* PILSBRY, *Cytherea meretrix* LINNÉ *Crassostrea gigas* (THUNBERG) *Eburna* sp. をあげている⁴⁾。

丹啓之助博士は同貝塚から *Corbicula maxima* PRIME, *Viviparus* sp., *Melanooides* sp. を得、*Corbicula maxima* PRIME についての研究を発表されている⁵⁾。

丹博士によると貝塚産の *Corbicula maxima* PRIME は現生のものに比して、大体小形で、殻が厚く且つ深く、Depth of paired valve の浅い扁平三角形のものからその反対のものへ変化したことを明らかにされている。然してその理由の最大要因を海水が台北盆地内に深く侵入していたことにあるとされている。

(2) 剣潭貝塚 鳥居龍蔵博士が1897年、円山貝塚調査の際発見されて、1901年に佐藤伝蔵氏により剣潭貝塚として報告されたものである。同氏によると *Crassostrea*, *Trochus*, *Nassarius* 等の少数の海棲種が得られたという。その後久しく所在不明となっていたが、1938年以来台湾神社の外苑拡張のために剣潭寺がとり払われ、剣潭山東南麓の切取りが行なわれた際、再び露出するに至ったものである。当時台湾神社記念碑下の崖面(A地点)、剣潭山の東方(B地点)および旧大宮町派出所の東北方約40m(C地点)の3カ所において露出が見られた。A、B 2地点においては *Corbicula maxima* PRIME を主とし、他に極めて少量の

Meretrix meretrix (LINNE), *Melanoides (Tarebia)*, *Crenulatus (Deshayes)* の類が出土していた。その状況は円山貝塚の状況に極めてよく類似していた。

C地点においては *Corbicula maxima* PRIME 以外に *Meretrix meretrix* (LINNE), *Tegula nigerrima* (GMELIN), *Lunella coronata granulata* (GMELIN) 等を出土せしめている。C地点の出土土器には格子目の印文を有するものが見られる。その状況は西新庄子, 社仔両貝塚に類似している。おそらく円山貝塚時代よりも下降すると考えられる西新庄子, 社仔系の先史住民が遺したものと思われる。

(3) 宮ノ下貝塚 1939年台湾神社造営用貯水池が掘られた際, 発見されたもので, 丹啓之助博士, 黒田徳米博士, 宮本延人教授の報告がある⁶⁾。厚さ 50~60 cm の泥をはさんで上下に 20~30 cm 厚さの貝層がある。

表皮の附着せる *Corbicula maxima* PRIME が採集されている。基隆河水面以下にある点から見て, おそらく当時沼地であり, 少し小高い所に住んでいた石器時代人が食用の貝殻をこの沼地に投入して形成されるに至ったものが, ある時期に洪水のために泥がその上に推積し, 又その上に貝が捨てられて, 二重になったものであるか, 或は現在より少し高い位置の山手にあった貝塚が河水でくずされて, 水底に溜り, 何回か崩れて貝層が二重になり, この貝塚が形成されたものかそのいずれかであろうとされる。表皮の保存はいずれにしても水中であるために永く保存されたものであろうと考えられている。灰褐または赤褐の粗質土器が石器獣骨とともに存在していたとされるから, 円山上層系統のもので, 時代をほぼ同じくしたものであろうと考えている。

(4) 西新庄子貝塚 西新庄子貝塚は1934年2月早坂一郎博士, 林朝棨教授によって発見されたもので, 両氏の報告が出ている⁷⁾。この貝塚はA, B 2カ所の貝塚より成っている。A貝塚は円山動物園入口から 1,000 m 真東にあって, 西新庄子において台湾煉瓦株式会社私設の軽便鉄道が東西の方向に急カーブする附近の田圃の畦に露出している。B貝塚はA貝塚の真南 350 m, 西新庄子市の民家の裏にある。出土土器には格子目の印文を有するものが見られ, 社仔貝塚のそれに近似している。おそらく下降する時期のものと考えられる。出土貝類は次の如くである。

A貝塚

Corbicula maxima PRIME

B貝塚

1. *Corbicula maxima* PRIME, 2. *Cellana testudinaria* LLINNÉ, 3. *Haliotis funebris* REEVE var. (?), 4. *Tegula (Chlorostoma) nigerrima* GMELIN, 5. *Batillaria tuberculata* LINNÉ, 6. *Batillaria* sp., 7. *Thais rudolphi* LAMARCK, 8. *Corbicula maxima* PRIME, 9. *Corbicula* sp. (*maxima* の幼殻?), 10. *Meretrix meretrix* LINNÉ, 11. *Crassostrea gigas* (THUNBERG), 12. *Anomalocardia squamosa* (LINNÉ)

同貝塚は海拔 3 m~5 m の低位置にある点において, また, 土器の様相から見て, 円山貝塚に比して遙かに下降する時代のものであることは疑いえないと思われる。

(5) 社仔貝塚 士林街の対岸砂洲中にある社仔部落のほぼ中央東側に位置している。海拔 3 m 位の低位置にある点において, 印文土器を包含する点において, 上述の西新庄子貝塚と時代を等しくする貝塚と考えられる。かつては, かなりの規模のものであったといわれているが, 筆者が調査した昭和19年頃には 3 m × 4 m 位の露層が見られるに過ぎなかった。この貝塚は山中樵氏, 宮本延人教授, 平山勲氏によって発掘が試みられているが, 報告は出ていない。なお部落内にも地表下 20~30 cm に貝の包含の見られる所があった。

貝類は *Corbicula maxima* PRIME を主体とするが, 稀に *Meretrix meretrix* LINNÉ, *Batillaria muluiformis* (LISCHKE), *Batillaria zonalis* (BRUGUIÉRE) の如き浅海砂泥または岩礁性の貝類が見出される。

貝塚中から印文土器の出土することは上述したが, 中国近代磁器片, 鉄器が豊富に共存することを平山勲氏は報告している。

(6) 太加納保貝塚 1900年佐藤伝蔵氏によってはじめて報告されたものである。田代安定氏, 伊能嘉矩氏ら

台湾先史時代の貝塚

書簡によると発見はそれより先きであったらしい。地点は現在の植物園から建国中学附近であると思われる。海拔4～5mの低平地にあり、台北盆地の最奥に位置している。

現在は貝塚の所在は不明になっている。佐藤伝蔵氏によると *Cytherea*, *Corbicula* sp. ? が最も多いと報告している。

現在の植物園から建国中学附近にかけて褐色厚手粗質の格子目の印文土器に伴い有段石斧、パツ型の石斧等が出土する。円山貝塚上層の形成の進行しつつあったある時期に相当する時期の遺跡であろうと考えられる。

(7) 西雲岩貝塚 觀音山成子寮登山口の西方山麓、西雲岩寺に通ずる路傍に位置している。標高は約10mである。宮本延人教授の報告によると貝塚は厚さ約20cm以下で、広さは推定で2m平方を出まいといわれる小規模のものであった⁸⁾。貝類は *Corbicula maxima* PRIME を主体としているがその他、次の品種が明らかにされている。

1. *Lunella coronata granulata* (GEMELIN),
2. *Melanoides (Tarebia) crenulatus* (DESHAYES),
3. *Semisulcospira libertina* (GOULD),
4. *Melanoides (Tarebia) obliquigranosus* (SMITH),
5. *Aegista (Plectoropis) mackensii* (ADAMS & REEVE)

以上は黒田徳米氏の同定による。

(8) 唹里岩貝塚 七星区北投唹里岸部落の北方の山縁の東南側斜面に極めて微弱な貝塚残跡が見られた。*Corbicula maxima* PRIME を主体としていた。包含遺物の状況は不明であるが、貝の状況から見て円山系の先史貝塚であろうかと思われた。

(9) 江頭貝塚 淡水線江頭駅のすぐ北側の丘背に2カ所、隧道の淡水側入口近くに1カ所と都合3カ所見られた。地名は関渡であるが、江頭ともよばれ、殊に駅名は江頭と書かれているので江頭貝塚とよぶことにする。淡水へ通ずるアスファルト道路が坂を上りつめた丘背において関渡埔頂199番地人家に向う小径の入口路傍北側赫土の崖面に貝塚の小露出面が1943年11月踏査の際には見られた。これをA貝塚とする。構成貝類は *Corbicula maxima* PRIME のみである。

第2の貝塚(B)は同一丘背(海拔40m)におけるA貝塚の南方、丘背南端の淡水側に面する西斜面(傾斜30°～40°)の標高37～38mの所に営まれもたものである。3.5m×1.55mの広がりをも有し、厚い部分で70cmの貝包含層があった。構成貝類は次の如くである。

1. *Corbicula maxima* PRIME,
2. *Meretrix meretrix* LINNÉ,
3. *Crassostrea gigas* (THUNBERG),
4. *Cyclina sinensis* (GMELIN),
5. *Lunella coronata granulata* (GMELIN),
6. *Tegula (Chlorostoma) argyrostoma* (GMELIN),
7. *Melanoides (Tarebia) crenulatus* (DESHAYES),
8. *Ellobium aurisjudae* (LINNÉ)

第3の貝塚(C)は台地西麓の隧道淡水側入口より約50mの低地にあり1m×1mの小残跡にして厚さ10cmを示していた。構成貝類は *Meretrix meretrix* のみであった。

A貝塚は社仔貝塚とほぼ同時代の貝塚と見られ、B貝塚は赤色塗彩を有する円山貝塚式の土器を含む点から円山貝塚と同時代のものであり、同系統のもと考えられた有肩石斧、靴型石器、有段石器は丘背遺跡に広く散布していたが、円山系の石器と見られた。但し貝塚上の表土中から格子目の印文を有する灰褐色の土器が出土することは印文土器が円山系無文彩色の赤褐色土器時代の後に出現することを層的に示す点において興味深い状況を示すものといえるのである。C貝塚に至ってはB貝塚の時代よりは更に下降する近代のものであることは、近代中国陶片のみが包含されていることが事情を明らかにしている。

(10) 北投競馬場、南港、淡水区八里庄、艋舺の貝塚 兵啓之助博士によると北投競馬場附近に貝塚があったとされる。また艋舺には近代中国陶片のみを出す貝塚があったという。平山勲氏によると南港および淡水区八里庄にも漢民族によって形成されたと見られる貝塚があったという。北投競馬場附近から鉛色の釉を有する近代中国陶器が多数出土していることから見て、北投競馬場附近の貝塚といわれたものも近代において漢

族或いは漢族の文化を接收した熟蕃系住民の形成したものであったかも知れない、他の諸例も亦同様の系統のものであったと見てよいであろう。

丹啓之助博士によると台北盆地に海侵が最も広く行なわれた時は現在海面上10m内外の高さを占める東新庄および内湖庄五分の貝層を生じた時代であろうとされる⁹⁾。この時期には円山貝塚のある小丘、芝山巖の小丘を除いて盆地内平野はすべて水面下に没していたわけであり、盆地内には円山および芝山巖の小丘を除いて居住地区は存在しなかったとわけである。それなら円山の小丘はいつ頃から先史住民によって居住されはじめたであろうか。縄蓆文を有する土器を使用した貝塚下層の住民時代にはこの系統の土で器が円山貝塚下層および芝山巖丘陵地縁に見出されるのみであることは、盆地内域の諸貝塚形成以前に属していたことを語るものではなかろうか。太加納堡貝塚の石器には円山貝塚の石器に共通するものが見出されることは、円山貝塚時代には太加納堡貝塚地帯は少くとも浮上して、附近に貝の生産地帯を有する居住地区をなしていたのではなかろうか。この地域は海拔4~5mと見られるから、辛うじて、水面に出ている程度の低地であったとするなら、他の西新庄子、社仔等の諸貝塚地区は当時水面下にあり、従ってそれら地区に貝塚形成が始まるのは少くとも更に1~2m前後の上昇が行なわれてから以後のことになるわけである。

Ⅲ 西海岸中部の貝塚

(1) 新竹公園の貝塚

台湾大学文学院史学系学生によって1948年6月新竹公園内中山堂附近において貝塚が2カ所発見された。包含遺物は銜色の釉を有する近代中国陶片を主体とし、玉製品を混じていたが、稀に灰褐色の粗質土器片をまじえていた。獣骨中に家犬の下顎が得られた。発見者の何廷瑞氏は今台大民族学系の講師をしておられる。筆者は遂に踏査する機会を得なかったので、以上の所見は何廷瑞氏による筆者への報告と採集品についての所見である。貝類は採集標品によると、*Corbicula maxima* PRIME を主体としていると考えられたが、少量の *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING) をも含んでいた。貝塚の規模の詳細は不明である。台北盆地における社仔貝塚にはほぼ近い時代、おそらくは社仔貝塚よりも更に下降する時代の平埔族系住民によって遺されたものではなかろうかと考えている。

(2) 後龍底貝塚

同貝塚は1941年11月金子寿衛男氏によって発見されたものである¹⁰⁾。貝塚は苗栗一公司寮間バス道路、後龍底一十班坑停留所の間中にあり、新竹県竹南区後龍郷、後龍底部落の一部に位置し、後龍溪南岸を構成する標高20~30mの段丘の頂、海拔28~29m、東に山を負い、西北、西、東南は南勢坑溪の谷を一望の下におさめ、景勝の位置を占めている。現海岸線まで3.5km。南勢坑溪に面した部分に形成されている。発見当時において1.2~1.5m高の崖面にレンズ状に断面が見られ、地表下約30~60m、厚さ10~30mのものが6カ所に見出された。

貝類は *Crassostrea gigas* (THUNBERG) を主体とし、他は極めて少い。包含貝類の種類は次の如くである。

1. *Crassostrea gigas* (THUNBERG),
2. *Meretrix lamarckii* DESHAYES,
3. *Cyclina sinensis* (GMELIN),
4. *Tapes variegata* SOWERBY,
5. *Pitar* sp. ?,
6. *Lunella coronata granulata* (GMELIN),
7. *Clithon retropictus* (MARTENS),
8. *Melanoidea (Tarebia) crenulatus* (DESHAYES),
9. *Melanoidea costellaris* (LEA),
10. *Cerithidea (Cerithidea) cingulata* (GMELIN),
11. *Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum* A. ADAMS,
12. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING),
13. *Ficus ficus* (LINNÉ),
14. *Thais luteostoma* (DILLWYN)

遺物包含層は貝塚を中心として約20mに見られた。附近の段丘面上の畑には少量ながら土器の散布が見られた。

赤褐または暗褐色の土器には無文のもの以外に、椀目状の交錯する条痕を有するもの、格子目状の印文を有するものが見られた。

台湾先史時代の貝塚

薄い白色土器が僅かに2片であるが、得られた細砂をまじえた緻密な土器にして、その1片は格子目状の印文を有している。石器は半磨製の石斧が得られている。これを大陸系の白色土器焼成技術と関連をもつと見てよいかどうか。筆者は関心をもっている。その他 *Conus* sp. の基部に穿孔したものが1例得られている。

(3) 苑裡貝塚

台湾縦貫鉄道苑裡駅の東方1.4 km、苑裡坑に通ずる路傍南側崖面に約23mにわたり、貝層の露出が見られる。厚い部分は約1 m余に達している。標高40~45mの西北に面した丘陵斜面に見られる。海岸までの距離2.5 km。貝類の中多く見られるのは *Crassostrea gigas* (THUNBERG), *Tapes variegata* SOWERBY, *Monodonta labis* LINNÉ, *Turbo granulicostata* GMELIN, *Melanoidea crenulata* (DESHAYES) 等である。丹啓之助博士が採集された標品は次の如くである¹¹⁾。

1. *Cyclina sinensis* (GMELIN),
2. *Corbicula* sp. (破片),
3. *Tapes variegata* SOWERBY,
4. *Crassostrea gigas* (THUNBERG),
5. *Unio douglasiae taiwanicus* (PILSBRY),
6. *Nerita ocellata* RÉCLUZ,
7. *Nerita patula* RÉCLUZ,
8. *Theodoxus retropectus* MARTENS,
9. *Melanoidea junica* (LEA),
10. *Melanoidea crenulata* (DESHAYES),
11. *Thais luteostoma* DILLUWIN,
12. *Monodonta labis* LINNÉ,
13. *Turbo granulicostata* GMELIN,
14. *Conus* sp.
15. *Tegula nigerrima* (GMELIN),
16. *Tegula argyrostoma* (GMELIN) var.,
17. *Melanoidea obliquegranosa* (SMITH)

同貝塚からは櫛目文を有する火度の高い黒色土器、即ち石璋如教授、宋文薰講師らのいわゆる第二黒陶、印文を有する火度の高い赤褐色土器を伴出する。磨製の凹背型の石庖丁、鉄製の小刀子が得られている。附近からは尚、打製の石鍬が発見される。

貝塚構成貝類の類似から、石器類の伴出の少い点から、また火度の高い印文土器を伴出する点等から見て上述の後龍底貝塚と密接な関係があると考えている。大安溪に沿って分布する石庖丁の型の類似する点から見て現在の Saqoleq 系または Tsele 系山地住民の先住者と関係をもつものではないかと考えている。

なお同貝塚については終戦後、劉茂源氏が苑中校刊の創刊号に調査概要を掲げておられる¹²⁾。

(4) 番仔園貝塚

貝塚の所在地の鉄砧山は台中県大甲鎮管轄、大甲台地の西北角に位置している。この鉄砧山の西側山脚下、頂店から台湾縦貫鉄道を越えて鉄砧山(山脚に至る小路の山脚にかかる附近にある李型住宅から70mの所で、道路修築の際発見されたもの。地名は番仔園。海拔約70 m、海辺よりの直線距離6 km。同貝塚は石璋如教授、宋文薰講師によって発掘調査され、俯身葬が発見されている¹³⁾。

土器には灰黒、赤褐色両方あり、ともに櫛文或は条痕文が施されている。その他灰褐色の印文陶を有している。石器に乏しいが、打製粗造の石鍬を伴い、凹背型の有孔石庖丁を伴出している。なお既に鉄製小刀子が出現している。

貝塚構成の貝は次の如くである。

1. *Anadara granosa* (LINNÉ),
2. *Meretrix meretrix* (LINNÉ),
3. *Crassostrea gigas* (THUNBERG) 絶対多数(80%以上),
4. *Lunella coronata granulata* (GMELIN),
5. *Mauritia (Arabica) arabica asiatica* SHILDER et SHILDER,
6. *Melanoidea (Stenomelania) junceus* (LEA),
7. *Melanoidea (Tarebia) crenulatus* (DESHAYES),
8. *Nerita undata striata* BURROW,
9. *Phalium strigatum* (GMELIN),
10. *Thais bonni* (DUNKER),
11. *Thais luteostoma* (DILLWYN)

構成貝類から見て文化遺物から見て、上述の後龍底、苑裡両貝塚と同一系に属することは明らかであり、後述の麻頭路、八卦山両貝塚とも同系の貝塚であると見られる。

(5) 麻頭路貝塚

大安溪南岸の鉄砧山山頂から大甲溪北岸の水尾山までの間に5カ所の遺跡が劉茂源氏らによって確認され、

その中水尾溪南岸台地西縁の斜面上の貝塚は劉茂源氏によって発見され、発掘あれているが、報告を見ていないので、水尾溪南岸に所在する麻頭路貝塚についてのみふれておきたい。同貝塚は宋文薫、張光直氏によって発掘調査されている¹⁴⁾。

土器は節目文を有する火度の高い黒陶（いわゆる第二黒陶）と同じく印文を有する火度の高い細質の灰陶を出す。石器には凹背型の石庖丁、両側帯欠口の粗造の石庖丁の他に他に打製の石鋏が伴出している。

貝塚構成の貝類は次の如くである。

1. *Gomphina veneriformis* (LAMARCK), 2. *Melanoides* (DESHAYES), 3. *Crassostrea gigas* (THUUBERG) var.,
4. *Thais boronni* (DUNKER), 5. *Viviparus quadratus* (BENSON) var.,
6. *Tapes variegata* SOWERBY,

この中 *Melanoides crenulatus* (DESHAYES) は丹啓之助教授によると現在台湾には甚だ少いとされるが、彰化（八卦山）および苑裡貝塚からも発見されていることは興味深い。

(6) 八卦山貝塚

台中県彰化市にある八卦山は海拔 70~80 m の稍平坦な面を有し、その表面は礫層を伴う紅土質の表土層、即ちいわゆる台地礫層に覆われている。この丘陵の北端は断崖をなし、そこに丘陵の断面があらわれている。

八卦山の北西方一面は墓場になっていたが、道路やゴルフ場等の開設のために切り開かれたために、貝塚が発見されるに至った。日本時代の彰化第一公学校の裏、今日の臺場より一段下の水準において、貝類の包含層を発見、最初に報告されたのは林朝棨教授である。貝塚より現海岸線までの直線距離 11 km。筆者が 1948 年 8 月離台する直前の時期には遺物を包含する主要な包含層は大部分崩壊し去ってしまっていた。

節目文を有する火度の高い黒陶、火度の高い赤褐または灰黒の印文土器の他に營埔系の黒色磨研土器をも伴出する。おそらく營埔系の黒陶文化層の上に第二黒陶文化層が重層している遺跡と考えられるが、今ではその状況を明らかにすることは困難になってしまった。

早坂一郎博士および林朝棨教授の報告によると *Ostrea*, *Arca*, *Cyrena* 等があるとされる¹⁵⁾。構成貝類の詳細は不明であるが、丹啓之助教授によって、*Melanoides crenulatus* (DESHAYES) が発見されることが指摘されている。その他、大形の *Conus* を切って作製した腕輪や細かな貝製の beads、瑪瑙の菱形の飾玉がえられている。日本時代の彰化高等女学校の田淵教諭は凹背型の磨製石庖丁、打製粗造の石鋏を採集されていた。

IV 西海岸南部の貝塚

濁水溪以南台南台地に至るまでの西海岸における状況は現在までのところ不明である。台南台地に至るや、その周辺に多数の貝塚が発見されている。

(1) 蔦松貝塚

台南台地北端から僅かに離れて位置している。台南市からの距離は東北へ約 7 km、縦貫鉄道永康駅から線路に沿って約 500 m の所に位置している。貝塚は蔦松部落の一部およびその東側に見出された。標高 7~10m、現海岸まで 13 km、現在養魚場となっている低地までの最短距離は約 6 km。台湾縦貫鉄道開設当時に発見されたものようであるが、その後、埋没して不明となっていたものが、1937 年 2 月金子寿衛男氏によって再発見されたものである。貝層は土砂採取のために鉄道の東側に沿って掘られた幅、約 8 m、深さ 0.6~1.3 m のトレンチ内に、500 m 余にわたり、断続的に露呈し、その数 24、地表下 30~50 cm に大体において位置していた。なお貝塚残跡は永康駅附近の鉄道西側の甘薯畑、蔦松部落内にも発見された。その数を合すれば、35に達している。

1940 年 8 月、筆者は鉄路東側の 24 の貝塚中の比較的そこなわわっていない一貝塚を完全に発掘したが、それは 3.5 m × 1.7 m の小貝塚にして最も厚い部分で 72 cm あった。その他多くは類似の小規模のものであるが、露出部の最大のもので 10 m × 4 m に過ぎなかった。鉄路に沿い、点々とほぼ直線的に断続して貝塚が見出されたところから見ると、貝塚線に沿って東側に住居地が存在しているものではなからうかと考えられる。

台湾先史時代の貝塚

東側の地表は拓かれて、水田となっているために十分調査を行なうことは困難であるが、東側水田の下層から木炭が発見されることから見ても、住居地を含む遺跡の存在することが想われるのである。

土器は赤褐色無文土器を主体とするが、*Anadara*属の貝の殻頂部で施文したのも見出される。土製の支脚が出土している。小型の祭器かと思られる黒色土器の他に、苑裡の黒陶に比定出来るほど火度の高い黒陶中に高脚と見られるもの出土する。他に、紅陶、黒陶両様の多数の腕輪を伴出する。

最も注目すべきは、水田下の包含層から下顎（人骨）の正面に穿孔した、Philippine の Igorot 族に見出される human jaw handle と相似する把手状のものが発見されていることである。Igorot 族に見られる如き human jaw handle が行なわれていたことは間違いないと考えられる。なおその顎骨には鋭い刃器を以て切りつけたと思われる刃痕が遺残していた。馘首の風習があったことが推定される。

貝塚の貝の種類は金子寿衛男氏によると43種得られたといわれるが、比較的普遍的に見られるものは次の種類である。

1. *Crassostrea gigas* (THUNBERG),
2. *Gafrarium gibbum* (LAMARK),
3. *Meretrix meretrix* (LINNÉ),
4. *Anomalocardia impressa* (ANTON),
5. *Katelaysia* (*Hemitapes*) *virginea* (LINNÉ),
6. *Batillariazonalis* sp.,
7. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING),
8. *Anadara granosa bisenesis* SCHENK & REINHART,
9. *Anadara cornea* (REEVE)

なお興味深いことは極めて少数であるが、*Corbicula maxima* PRIME が見出されたことである。

(2) 三崁店南方の貝塚

台南から北方へ三崁店部落に至る道路を辿って、集落に入る前、約2 km、道路西側に極めて小規模の残跡が1940年8月に発見された。長さ1.3 m厚さ25 cmの断面を見せて *Anadara granosa* (LINNÉ) によって構成された残跡があった。文化遺物を見るに近代中国磁器片、鉛色の粘を有する近代中国陶片のみより成っていることよりして、時代的にはずっと下降するものと見られ、且それを遺したものは先史時代人にあらずして、近代の平埔族か或は漢族自身によって遺されたものであろう。

(3) 台南台地西北縁の貝塚

台南台地西北縁はやや急斜面をなして、沖積低地に接している。これらの斜面に点々と小貝塚が散在している。既存のものの中には、10 m × 7 m、厚さ40 cmに達するものも見出された。

(a) 六甲頂貝塚

台南から北へ約2 km、縦貫道路と佳里街に至る道路の分岐点附近は六甲頂とよばれている。縦貫道路東側の無線電信施設のある台地縁（標高13~15 m）に貝の露出が見られる。台地縁に平行して、約500 mの間に6カ所見出された。標高13~15 m、海岸まで約8.5 km、養魚場低地まで2.5 km。

東側台地上に住居地があったものではなかろうかと考えている。貝塚はほぼ15 m × 15 m、厚い部分で約1 m程度のもの、或いはややそれを越える程度のものであったが、戦時中無線電信施設が構築されたために主要貝塚は消滅してしまった。然し1947年1月、踏査の際、無電施設の西側において地盤の切り取られた所に好露出を見せる部分のあることが判明した。然し軍用地であったため、中国兵に逮捕されるに至った。台南歴史館館長石陽睢氏の尽力によって辛うじて釈放されることを得たが、ために、調査を行うことは出来なかった。当時筆者採集の貝類は次の如くである。

1. *Nerita* (*Ritena*) *lineata* GMELIN,
2. *Cerithidea* (*Cerithideopsis*) *cingulata* (GMELIN),
3. *Telechopium* sp.,
4. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING),
6. *Anadara scapha* (MEUSCHEN),
7. *A.* (*Tegillarca*) *granosa* (LINNÉ),
8. *A.* (*Scapharca*) *gubernaulum luzonica* (REEVE),
9. *Crassostrea gigas* THUNBERG,
10. *Anodontia corrugata* (DESHAYS),
11. *Gafrarium tumidum* RÖDING,
12. *Cyclina sinensis* (GMELIN),
13. *Chione* (*Clausinella*) *isabellina* PHILIPPI),
14. *Anomalocardia* (*Cryptonemella*) *producta* KURODA & HABE,
15. *Katelaysia* (*Hemitapes*) *virginea* (LINNÉ),
16. *Meretrix petachialis* (LAMARCK)

土器は赤褐色粗面(無文)土器, 磨研黒陶を出し, 石器には磨製, 打製の石鋏, 磨製の石庖丁, 石鎌を伴う。黒陶は波状の櫛目文を有するものを普通とするが, 渦状文を伴うものもある。火度の点からいうなら營埔系の黒陶, 石教授, 宋講師のいわゆる第一黒陶に酷似しているが, 高雄県の大湖, 桃仔園, 鳳鼻頭等の南部の黒陶の系統に属するものである。

なお, 六甲頂から塩行に至る間の道路に沿う, 台南台地西北縁に点々と貝の散布が見られた。貝塚と見られ, 赤褐色無文土器を包含していた。貝の種類については遺憾ながら記録を作成していない。

(b) 三本木高地貝塚

台南市三分子練兵場の東北部には南北 500 m にわたる小丘があり, その北端には最高所 23.3 m を示す砂丘が発達している。砂丘の北側は急崖をなしていて, その丘縁を八千代川と日本時代にはよばれていた小流が西流している。貝層は上述の砂丘の北側急崖の上層を成している黄褐色砂層中にレンズ状に介在していた。(八千代川は1940年12月調査当時海拔 2~3 m, その川岸から 8.5 m の位置に貝層が見出された。)水流のために斜面の侵蝕が行なわれたために主要部分は崩壊してしまったようである。1940年12月調査の時には長さ 1.5 m, 奥行 40~50 cm, 厚さ 90 cm の末端部残跡が残存していたに過ぎなかった。海岸までの距離約 8 km, 養魚場低地まで約 3 km。包含された貝類は *Crassostrea gigas* THUNBERG 以外には見出されなかった。文化遺物は貝塚残跡中には 1 片も含まれていなかった。鹿科かと思われる動物の焼けた骨の破片が出土するので, 先史貝塚であろうと考えた。附近から赤褐色粗面(無文)土器, 黝黒色泥質土器, 縄蓆文を伴う土器, 黒陶質土環, 打製, 磨製の石鋏, 磨製の石庖丁, 石鎌等が得られた。

(4) 台南台地西南縁の貝塚¹⁶⁾

(a) 台南市郵便局附近貝塚 標高 7 m 前後の台南市郵便局附近に貝塚のあることが, 鹿野忠雄博士の台湾石器時代遺物地名表(史前学雑誌第 2 巻第 2 号)に見えている。土器が出土したとされている。然るにその後, 所在不明になっていたが, 1947年 1 月郵便局構内無電台附近に防空壕を構築した際, 貝が露出したと石陽階氏に聞いたので, 石氏と共に調査したところ, *Crassostrea gigas* (THUNBERG), *Meretrix meretrix* (LINNÉ), *Anadara granoas* (LINNÉ) が散乱していた。海岸まで約 5.5 km, 養魚場低地まで約 2 km。それらの貝と共に銜色の釉を有する近代中国陶片が露出していた。先史土器と見られるものは見出されなかった。鹿野忠雄博士は土器が出土すると記録されているので, 近代中国陶片と混じて先史土器が遺されているものと考えるが, 発掘調査は行なうことが出来なかった。おそらく, 北部の新竹公園貝塚に, 時代的には相当する, 歴史時代初頭の貝塚と見てよいかと思われた。

(b) 芭蕉脚貝塚 台南市大正公園から南へ約 2.5 km, 汐見ヶ丘を経て, 塩埕部落への道を辿り市営火葬場への分岐点に達するや, 真南に火葬場への道を行き, 小溪を越えて, 台地上に出る。その台地面に点々と小貝塚がある。分布範囲 3 m × 3 m 程度の小貝塚である。*Anadara cornea* (REEVE), *Katelsia (Hemitapes) virginea* (LINNÉ), *Katelsia (Hemitapes) virginea* (LINNÉ), *Anomalocardia (Cryptonemella) producta* KURODA & HABE 等が普通に見出された。土器は赤褐色粗面(無文)土器, 同色の土環が見出された。現海岸線まで 3.5 km, 養魚場となっている西方低地または塩田まで約 2 km。

(c) 鞍仔貝塚

台南市の南約 km, 旧鞍仔部落の西方に当り, 標高約 10 m の台地西南縁に南北約 800 m にわたり, 8 ヶ所の小貝塚が分布している。おそらく貝塚縁に沿って, その東側台地斜面に集落があったと思われる。現海岸を去ること約 3 km, 貝塚の散布範囲および貝層の厚さは次の如くである。

地点	散布範囲	貝層の厚さ	表土	備考
A	8 × 5 m	1 m	なし	
B	9 × 10 m	0.5 m	0.2~0.4 m	
C	10 × 8 m	—	—	
D	15 × 2 m	—	—	破壊

台湾先史時代の貝塚

E	50 × 1 m	0.4—0.15m	—	破壊
F	1 × 1 m	—	—	破壊
G	20 × 3 m	—	—	破壊
H	2 × 1 m	0.2—0.15m	1 m	崖面にレンズ状に露出している

最も大きいと見られたB貝塚を金子寿衛男氏と発掘調査した他、A、E、Hについては貝層の厚さを試掘によって調査したのみである。貝類の状況については、金子寿衛男氏が調査して次表を作製された。(△：多量存在、+：普通に見出される、○：少量存在、●：極めて少し、×：有、-：無)

	A	B	C	D	E	F	G	H
1. <i>Anadara granosa</i> (LINNÉ)	+	+	×	×	×	-	×	×
2. <i>Anadara cornea</i> (REEVE)	△	△	×	×	×	×	×	×
3. <i>Pedalion ephippium</i> (LINNÉ)	-	-	-	×	-	-	-	-
4. <i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG)	+	+	×	-	×	×	×	×
5. <i>Ostrea</i> sp.	×	×	-	-	-	-	-	-
6. <i>Placuna placenta</i> (LINNÉ)	●	●	-	-	-	-	-	-
7. <i>Cyclina sinensis</i> (GMELIN)	○	+	×	×	-	-	-	-
8. <i>Gafrarium gibbium</i> (LAMARCK)	○	△	×		×			×
9. <i>Circe scripta stutzeri</i> (DONOVAN)	○	+	×	-	-	-	-	-
10. <i>Meretrix</i> sp.	△	△	×	-	×	×	-	×
11. <i>Pitar sulfurea</i> PILSBRY	●	○	-	-	-	-	-	-
12. <i>Pitar reeveana</i> (HIDALYS)	●	●	-	-	-	-	-	-
13. <i>Venus (Clausinlla) eisabellina</i> PHILIPPI	○	●	-	-	-	-	-	-
14. <i>Anomalocardia impressa</i> (ANTON)	○	+	×	-	-	×	×	×
15. <i>Katylsia (Hemitapes) virginea</i> (LINNÉ)	○	+	×	-	-	×	×	×
16. <i>Chione (Anomalodisus) squamosa</i> (LINNÉ)	+	+	×	×	×	×	×	×
17. <i>Sanguinolaria (Soletellina) acuminata</i> (REEVE)	-	●	-	-	-	-	-	-
18. <i>Unio douglasiae taiwanicus</i> (PILSBRY)	-	●	-	-	-	-	-	-
19. <i>Geloina luchuana</i> (PILSBRY)	●	●	-	-	-	×	-	×
20. <i>Nerita lineata</i> GMELIN	○	○	×	×	×	×	-	-
21. <i>Nerita planospira</i> ANTON	-	●	-	-	-	-	-	-
22. <i>Cerithidea rhizophorarum</i> (A. ADAMS)	○	○	-	-	-	-	-	-
23. <i>Cerithidea ornata</i> A. ADAMS	○	○	-	-	-	-	-	-
24. <i>Cerithidea cingulata</i> (GMELIN)	●	○	-	-	-	-	-	-
25. <i>Batillaria zonalis</i> (BRUGUIÈRE)	○	○	-	-	-	-	-	-
26. <i>Batillaria mulutiformis</i> (LISCHKE)	●	○	-	-	-	-	-	-
27. <i>Terebralia semistriata</i> (BOLTEN : RÖDING)	+	+	×	×	×	-	×	-
28. <i>Telescopium telescopium</i> (LINNÉ)	○	○	×	×	×	×	-	×
29. <i>Turritella terebra</i> (LINNÉ)	●	-	-	-	-	-	×	-
30. <i>Strombus isabella</i> LAMARCK	○	○	×	-	-	-	×	-
31. <i>Polinices pyriformis</i> (RÉCLUZ)	○	●	-	-	×	-	-	×
32. <i>Hemifusus tuba</i> (GMELIN)	-	○	-	-	-	-	-	-
33. <i>Thais mutabilis</i> (LINK)	○	○	-	-	-	-	-	-
34. <i>Ellobium aurisjudae</i> (LINNÉ)	●	-	-	-	-	-	-	-

35. *Melanoides crenulatus* (DESHAYES)

○ ○ × × - - × ×

36. *Melanoides costellaris* (LEA)

● ● - - - - -

文化遺物としては赤褐色粗面(無文)土器, 同色の土環がえられる。土器から見て, また石器の見出されない点から見て, 上述の蔦松貝塚の文化に近似している。

(d) 十三甲貝塚

台南市の南6 km, 縦貫道路から喜樹部落に至る道路開設の際発見された。表土下2 m, 直径2 m, 最厚部40 cmの小貝塚。砂丘を除いたために露呈するに至ったもの。標高約14 m, 現海岸線より約5 km。包含貝類のうち多数を占めたのは *Gafrarium tumidium* RÖDING であるが, 他にも少数ながらえられた。表示すれば次の如くである。

1. *Gafrarium tumidium* RÖDING, 2. *Meretrix meretrix* (LINNÉ), 3. *Pitar sulfurea* PILSBRY,
4. *Chione (Anomalodiscus) squamosa* (LINNÉ), 5. *Crassostrea gigas* THUNBERG 6. *Nerita (Undata) striata* BURROW,
7. *Telescopium telescopium* (LINNÉ), 8. *Anadara (DILUVARCA) tricenicosta* (NYST),
9. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING), 10. *Latirus craticulatus* (LINNÉ),
11. *Anomalocardia producta* KURODA & HABE 12. *Arcopagia (Cyclotellina) discus* (HANLEY),
13. *Cyclina sinensis* (GMELIN),

土器は黝色無文(泥質)土器, 赤褐色無文土器, 土環を伴い, 石器は磨製の石庖丁, パツ型石器, 等を伴う。

(5) 台南台地東縁および台地上の貝塚

(a) 牛稠仔遺跡と貝塚の残跡

牛稠仔遺跡は台南台地東南縁に位置している。車路埕製糖工場の社宅街の北側に続く, ほぼ20 m等高線に沿う台地上, およびその東斜面に遺物が散布している。現海岸までの距離約6.5 km。但し貝塚形成当時においては遺跡地方の東側に海水が及んでいたと考えられるから, 遺跡はすぐ直下に海水を臨んで位置していたと考えられる。

繩蓆文を有する赤褐色, 灰黝色土器(同質の土器には無文のものもある。何れも短い口唇を有するもので, 澎湖島良文港の繩蓆文を有する土器に酷似する。幅広い口縁を有する赤褐色粗面(無文)土器とは系統を異にする)櫛目文を有する磨研黒陶も僅かに混在している。石器には olivine 質を含む玄武岩石器が多量に出土する。磨製品の中には石斧があるが, 打製のは石鍬と見られる。その他 slate 製の犁形の石器, 磨製石鍬, 石庖丁を出土せしめる。olivine basalt は澎湖島に産する玄武岩と性質が酷似することから, 澎湖島から搬入されたものと考えられる。

この遺跡の発見者萩原直哉氏はこの遺跡中に貝塚の残跡を発見発掘されたというが, 記録は作成されていない。然し萩原氏によると *Crassostrea gigas* THUNBERG のみより成っていたという。筆者が遺跡中において見出した貝はその他に, *Anadara cornea* (REEVE), *Chione (Anomalodiscus) squamosa* (LINNÉ)があった。

(b) 台南市東門町農事試験場東方遺跡

台南市東門町から東へ関廟部落に至る道を行くと, 製糖用鉄路に出る。鉄路沿いに東南へ約150 m 附近一帯が遺跡をなしている。標高約22 m。線路面側の高さ1 m内外の切りとられた崖面に遺物包含層が露出し, 繩蓆文を有する赤褐色土器が含まれている。玄武岩製石斧, 骨器も得られた。遺物は砂質の表土下の黒色有機質土中に含まれている。黒色有機質土壌下は淡褐色粘土層になっている。この淡緑色粘土層表面に *Crassostrea gigas* THUNBERG, *Anomalocardia (Cryptonemella) producta* KURODA & HABE, *Anadara cornea* (REEVE) 等の貝殻を含む所が見出された。貝層中の土器の包含は確めていないが, 貝層中に獣骨が包含されていることから, 先史貝塚であることは確実であろうと考えた。

(c) 網寮貝塚

台湾先史時代の貝塚

台南工業専門学校から東へ、大湾部落への道を辿り、第二の小溪を渡ると、日本時代、日本テックス会社が
あった。貝層は会社のやや東北方に向う牛車道の崖面に露出していた。*Crassostrea gigas* (THUNBERG)
より成っていた。

貝層は黄褐色砂層中に、南北約 30 m、東西約 10 m にわたり分布、表土 80 cm、最厚の部分にして 1 m に及
んでいた。更にその東方に 2 カ所の小散布が見られた。それら貝塚の所在地点は大体において、標高約 15 m。
Crassostrea gigas (THUNBERG) 以外には少量の *Gafrarium gibbium* (LAMARCK), *Katelsysia*
(*Hemitapes*) *virginea* (LINNÉ), *Nerita planospira* ANTON, *Meretrix meretrix* (LINNÉ) 等が
混在していた。

土器その他の文化遺物が貝層中にも附近にも見出されないで、先史貝塚なりや否や判明しないが、貝類
の埋積状態は三本木高地貝塚(残跡)のそれによく似ていた。

台南台地の表層には諸所に淡緑色の粘土層が存在し、煉瓦製造に使用されているが、これらの中には汽水
性浅海性の貝殻が化石として相当含まれていることは、台南台地がかつて浅海底にあった時代のあることを
語っているわけである。台南農事試験場東方の貝塚の状況から見ると、台南台地が浅海上に浮上し、Off-
shore bar を成していた時代に最初の先住民——赤褐色の縄蓆文を有する土器を使用した——が定着したと
見られる。台南台地は全体として、西側は頗る緩かに、東側はやや急で、西方からする風の影響を多分に被
った砂丘の標式的な形を示しているが、縄蓆文を有する土器の単純遺跡が台地の東寄りの高い部位にあり、
同じく台地東南のはば等高の車路墘牛稠子にも縄蓆文土器を主体とする遺跡のあることは、縄蓆文土器使用
住民の初期の定着がほぼ 20 m 等高線附近の部分が最も古い Off-shore bar として浅海に囲まれていた時
代であると考えてよいのではないかと思う。

櫛目文を有する黒陶の使用者、泥質の黒陶使用者はその後、台南台地が遙かに隆起して拡大するに至って、
標高 13~15 m 附近の位置を占拠するようになる。その後砂丘の形成が進み台南台地が更に西方に拡大する
に至って、標高 10 m 附近に赤褐色粗面(無文)の土器使用の時代が始まるのである。

西方の水域が更に後退し、標高約 7 m の台南市郵便局附近が台南台地西縁に隆起し、適当な居住地区にな
った時代は既に旺盛な中国陶器登場の時代であった。

(6) 二層行溪以南の貝塚

(a) 中州貝塚

二層行溪の南、溪に近い中州部落の東方約 500 m 附近にある南北の方向にのびる小丘の西斜面に、南北
600 m にわたって約 13 カ所に貝の散布が見られた。耕作のため破壊されている。比較的破壊を免れたもの
について金子寿衛男氏の調査されたものによると、表土下 50~60 cm、貝層の厚さ 20~30 cm のものが多く、
範囲は最大のもので 5 m × 9 m。一般に貝量は少い。文化遺物は少い。然し格子目の印文を有する赤褐色土
器、石庖丁、磨製、打製の石斧、石鍬の類を伴う。

貝類は次の如きものが見られた。

1. *Crassostrea gigas* (THUNBERG),
2. *Anadara granosa* (LINNÉ),
3. *Gafrarium*
(LAMARCK),
4. *Katelsysia* (*Hemitapes*) *virginea* (LINNÉ),
5. *Meretrix meretrix* (LINNÉ),
6. *Anadara cornea* (REEVE),
7. *Anomalocardia impressa* (ANTON),
8. *Terebralia*
semistriata (BOLTEN : RÖDING),
9. *Telescopium telescopium* (LINNÉ)

貝塚地帯の標高約 10 m、現海岸線まで約 8 km。

(b) 大湖貝塚

二層行溪の南、縦貫鉄道の東側、標高 20~23 m の台地面に分布している。海岸までの距離約 7.5 km。
大湖の部落より阿蓮郷に通ずる道路を中心として、北は二層行溪の南岸に達する約 1.2 km、幅東西に 200~
300 m にわたる遺跡の中、主として台地西側に貝塚が点々と分布している。その数は 13、その最大のもの
は 20 m × 20 m の広がりを持ち、最厚の部分において 70 cm。この最大の貝塚は 1938 年末から 1939 年初頭に

けて、移川子之藏教授、金関丈夫教授、宮本延人教授および筆者らが発掘調査した。

土器は櫛目文を有する有沢の黒陶、厚手の灰藍色粗質土器、赤褐色無文土器、格子目の印文を有する土器を伴う。鼎脚（赤褐色、黒色）高脚（黝色）が発見されている。

石器には多数の磨製打製の石鍬、犁形石器、磨製石鍬、石庖丁等を伴う。貝類は次の如くである。貝類は 1. *Crassostrea gigas* (THUNBERG), 2. *Anomalocardia impressa* (ANTON), 3. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING) が多く、4. *Katylisia (Hemetapes) virginea* (LINNÉ), 5. *Anadara cornea* (REEVE), 6. *Telescopium telescopium* (LINNÉ), 7. *Nerita (Ritena) lineata* GMELIN, 8. *Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum* A. ADAMS, 9. *Geloina fissidens* (PILSBRY) 10. *Crassostrea gigas* THUNBERG, 11. *Chione (Anomalodiscus) squamosa* (LINNÉ), 12. *Terebralia semistriata* (BOLTEN-RÖDING), 13. *Anomalocardia (Cryptonemella) producta* KURODA : HABE, 14. *Anadara cornea* (REEVE), 15. *Geloina fissidens* (PILSBRY), 16. *Nerita (Ritena) lineata* GMELIN, 17. *Telescopium telescopium* LINNÉ, 18. *Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum* A. ADAMS 等が、普通に見られたが、金子寿衛男氏は筆者採集のものよりは遙に多く43種にわたる標品を同定されたという。

(c) 湖内貝塚

縦貫鉄道大湖駅の西方約2 km に湖内部落がある。湖内の部落西端から竹瀝に至る道路の西側一帯、即ち西に傾斜する標高4.5~7.5 m, 南北約1 km, 東西約200 m にわたる畑地が遺跡である。海岸までの距離約4 km。貝塚は現在までのところ、東側に4カ所、西側に12カ所知られている。これら貝塚を中心にして遺跡一帯に土器が包含され、また耕土中に散布している。貝類の散布は20 m × 20 m 以上のもの5カ所が知られている。

土器は赤褐色粗面（無文）土器、*Anadara* 属の貝の殻頂部を施印した土器、土環、土製支脚を出す点、台南台地の北端近く位置する葛松貝塚の文化様相に相似している。僅かながら磨製の石斧、凹石を伴うが、石器に乏しい点でも葛松貝塚の状況に似ている。普通に見られる貝は次の如くであった。

1. *Anadara granosa bisensis* SCHENCK & REINHART
2. *Anadara (Tegillarca) nodiifera* (V. MARTENS),
3. *A. (Tegillarca) granosa* (LINNÉ),
4. *Gafrarium tumidum* RÖDING,
5. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING),
6. *Telescopium telescopium* (LINNÉ),
7. *Circe tumefacta* SOWERBY,
8. *Chione (Anomalodiscus) squamosa* (LINNÉ)

等であるが稀に *Corbicula subsuclata* CLESSIN が見出された。然し金子寿衛男氏は37種にわたる同定を行なわれた。遺跡の西側は水田を距てて、養魚場となっている潟湖に連なっている。

(d) 烏樹林貝塚

縦貫鉄道の路竹駅の西南約4 km に烏樹林部落がある。警察官駐在所の北方約100 m, 竹瀝部落への道路東側の崖面に見出された。表土の厚さ1 m, 貝層の底辺1.8 m, 厚さ0.2 m の小規模のもの。淡黄色の砂質粘土中に介在している。湖内貝塚同様、台地西縁部に位置し、標高6~7 m と推定される。

前面に広大な養魚場、塩田あり、現海岸まで3.5 km。貝層中から湖内系の赤褐色粗面（無文）土器が見出された。貝類は *Crassostrea gigas* (THUNBERG), *Anomalocardia impressa* (ANTON), *Circe stutzeri* (DONOVAN), *Telescopium telescopium* (LINNÉ), *Crassostrea (Saxostrea) paulucciae* CROSSE 等が普通に見られた。

(e) 小岡山貝塚

小岡山は高雄県岡山街東北約4 km に位置する傾動地塊である。遺跡は地塊の南端の東南に面した相当高い斜面に営まれ、西側および東南側の石灰岩採掘場には諸所に遺物包含層が露出していた。貝塚は1930~1931年当時地塊斜面および石材採掘場に3カ所見出された。極めて小規模のもので、量も少かった。海岸までの距離約11.5 km。遺物としては、赤褐色粗面（無文）土器を主体とするが、縄縵文を有するもの、格子

台湾先史時代の貝塚

目の印文を有するものも僅かながら見出された。石器には打製の石鋏、方角斧等が見出された。

貝類は *Gafrarium tumidium* RÖDING, *Meretrix petechalis* (LAMARCK) が比較的多く見出された。筆者採集のものについて表示する。

1. *Gafrarium tumidium* RÖDING,
2. *Meretrix petechalis* (LAMARCK),
3. *Anadara scapha* (MEUSCHEN),
4. *Chione (Anomalodiscus) squamosa* (LINNÉ),
5. *Crassostrea gigas* THUNBERG,
6. *Telescopium telescopium* (LINNÉ),
7. *Strombus (Strombus) isabella* LAMARCK,
8. *A. Cornea* sp.

(f) 螺底貝塚

岡山街の西南約6 km, 潟湖をなす水辺に近く螺底山とよばれる小丘がある。貝塚はこの小丘の西南丘縁に3カ所見出された。小丘の南端螺底部落への路傍の溝中に見出されたものは長さ5 m 厚さ10~15cmの小規模のものであったが、丘縁のやや高い位置に見出されたものは約30m×20 mの分布を見せているものがあった。(1941年8月)。標高約8~10 m, 海岸までの距離約1.5 km。

土器は赤褐色粗面(無文)土器, 石器は見出されなかった。金子寿衛男氏は貝類について18種見出されている。

筆者採集時, 比較的多く存在すると見られたものを表示する。

1. *Crassostrea gigas* THUNBERG,
2. *Terebralia Semistriata* (BOLTEN : RÖDING),
3. *Gafrarium tumidium* RÖDING,
4. *Circe tumefacta* (SOWERBY),
5. *Chione (Anomalodiscus) squamosa* (LINNÉ),
6. *Meretrix petechialis* (LAMARCK),
7. *Anomalocardia (Ryptonemella) producta* KURODA & HABE

(g) 阿穀仔貝塚

螺底部落の西南約1.5 km, 阿穀仔部落の甘藷畑中に貝の小散布地が見出された。(1941年8月) 土器は赤褐色粗面(無文)土器を伴う。

筆者採集の貝類を表示しておく。

1. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING),
2. *Gafrarium tumidium* RÖDING,
3. *Circe tumefacta* SOWERBY,
4. *Katylisia (Hemitapes) virginea* (LINNÉ),
6. *Hemifusus tuba* (GMELIN),
7. *Anadara scapha* (MEUSCHEN),
8. *K. marmorata* (LAMARCK),
9. *Chione (Anomalodiscus) squamosa* (LINNÉ),
10. *Crassostrea gigas* THUNBERG

(h) 後頸貝塚

縦貫鉄道楠梓駅の西方約3 km, 後勁川南岸の台地上に位置する後頸部落の2 km西北に当る一帯の地区、貝塚は東北から西南に約100 mにわたる間に3カ所見出された(1941年)。海拔約10 m前後、海岸までの距離約5 km。養魚場まで約2.5 km。最北のものが最も大きく、雨期に出現した地溝中に露呈したものであるが、筆者の踏査した1941年8月当時、既に大半崩壊していた。当時、表土は30~40 cm。表土下に厚さ約90cmの貝層が見出された。土器は赤褐色粗面(無文)土器, 石器は殆んど行なわれていないといってよい状態。ごく微量の発見があるに過ぎない。

金子寿衛男氏は27種類の貝を同定されているが、筆者は次の10種の標品を採集した。

1. *Gafrarium tumidium* RÖDING,
2. *Circe tumefacta* SOWERBY,
3. *Crassostrea gigas* THUNBERG,
4. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING),
5. *Hemifusus tuba* (GMELIN),
6. *Katylisia (Hemitapes) virginea* (LINNÉ),
7. *K. marmorata* (LAMARCK),
8. *Anadara scapha* (MEUSCHEN),
9. *Chione (Anomalodiscus) squamosa* (LINNÉ),
10. *C. (Clausinella) isabelina* (PHILLIPI)

二層行溪以南の貝塚は小崗山を除くなら、標高において最も高い台地状地形に位置する大湖貝塚は有沢の黒陶(櫛目文を有する)を豊富に伴い、なお石器を豊富に伴う点において最も注目し得る遺跡である。他

は赤褐色粗面(無文)土器の遺跡にして石器は微量となる。全く伴出しない遺跡もある。それらの中にあつて湖内貝塚は大湖貝塚に次ぐと見られる。台南台地の北端から僅かに離れて位置する鳶松貝塚に時期的に比定出来る遺跡であろう。

西海岸南部における赤褐色粗面(無文)土器の時代はその先史時代末期の様相を示すと見てよいと思う。石器の使用は次第に微量となる。然して石器の使用が全くやむ時こそ、先史時代の終末を意味していたものであらうと考える。

(7) 寿山周辺の貝塚

高雄県の寿山周辺には、内惟の龍泉寺裏の貝塚および、寿山北端の旧桃仔園部落の北側に位置する桃子園遺跡、桃仔園のすぐ東方に対峙する半屏山山麓に見出される。

(a) 龍泉寺裏貝塚

龍泉寺は高雄市内淮、即ち寿山東縁の山脚の石灰岩の間に出来た小溝の溝の口に見出された小規模のもの。厚き部分にして約60 cm、山脚の岩場の傾斜面に形成されている。貝の種類については1939年調査当時、次の種類が見出された。

1. *Crassostrea gigas* (THUNBERG), 2. *Chione (Anamalodiscus) squamosa* (LINNÉ), 3. *Anadara granosa* (LINNÉ), 4. *Meretrix meretrix* (LINNÉ), 5. *Telescopium [telescopium]* (LINNÉ), 6. *Anadara cornea* (REEVE), 7. *Gafrarium tumidum* RÖDING

なお、龍泉寺背後の石洞中に、人骨と貝殻とが土屋恭一氏によって発見されている。

寿山西側の現海岸から貝塚所在の小溪口まで約2.5 km。但し貝塚時代は溪口附近に海水が及び、寿山は孤島をなしていたと思われる。

龍泉寺裏貝塚の土器は赤褐色粗面(無文)土器の他に赤褐色および黒色の土環を伴っていた。黒陶は全く伴出せず、僅かに土環に黒陶の名残をとどめている。石器の発見は極めて少いが石斧2例が得られた。

(b) 桃仔園貝塚

桃仔園遺跡は寿山附近のみならず、全島的に見ても規模の大なる遺跡である。南北約300 m、東西約350 mに及ぶ地域は厚さ約1.3 m乃至1.5 mに及ぶ土器の包含層であった。遺跡は海面向の一部が既に波浪のために浸蝕を受けているために、遺物は海辺の砂浜および水中にも発見される。この附近は清朝時代に萬丹港のあった所であるが、中国人の記録の中には土蕃の集落について、或はその遺跡についての記載は何ら遺っていない。従つて清朝時代、この附近に船舶の出入した頃には、おそらく誰にも気づかれぬ遺跡として存在していたものであらうと思われる。

貝塚は遺跡中には4カ所に貝塚の残跡を留めている。調査は1941年から1942年にかけて十数回にわたつて入念な踏査を行なつたが、当時、日本海軍の軍港建設のために大規模な地形変更が進行中であつたために計画的な発掘調査を行うことは不可能であつた。

4カ所の貝塚の中、2カ所は微小な残跡であつたので、やや規模のはっきりした、2貝塚について記載しておきたい。それらは海波を望み得る台地上にあり、両者の間は約50 m、北方のそれをA貝塚、南方のそれをB貝塚として、主食せる貝の種類をあげれば次の如くである。

A貝塚遺跡中の掘り下げられた小路の路面に底辺4 m、厚き部分にて約20 cmのレンズ状の断面が露呈されていた。貝の種類には次の諸品種が見出された。

1. *Chione (Anamalodiscus) squamosa* (LINNÉ), 2. *Anadara gubernaculum luzonica* (REEVE), 3. *Meretrix meretrix* (LINNÉ), 4. *Gafrarium tumidum* RÖDING, 5. *Geloina fissidens* (PILSBRY), 6. *Anadara cornea* (REEVE), 7. *Katelsysia (Hemltapes) virginea* (LINNÉ), 8. *Anomalocardia impressa* (ANTON), 9. *Circe stutzeri* (DONOVAN), 10. *Pluna placenta* (LINNÉ), 11. *Chione (Clausinella) isabellium* (PHILIPPI), 12. *Crassostrea gigas* (THUNBERG), 13. *Telescopium telescopium* (LINNÉ), 14. *Terebralia semistriata* (BOLTEN)

台湾先史時代の貝塚

: RÖDING), 15. *Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum* A. ADAMS, 16. *Batillaria zonalis* (BRUGJIÉRE), 17. *Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata* (GMELIN), 18. *Nerita (Ritena) lineata* GMELIN

以上の中、頻度についていえば *Chione (Anamalodiscus) squamosa* (LINNÉ) が最も多く、*Anadara gubernaculum luzonica* (REEVE), *Meretrix meretrix* (LINNÉ), *Gafrarium tumidum* RÖDING, *Anadara cornea* (REEVE), *Katelsia (Hemitapes) virginea* (LINNÉ), *Crassostrea gigas* (THUNBERG), *Telescopium telescopium* (LINNÉ) 等が普通に見られ、他は少かった。

B貝塚は約5 m平方に散布、厚い部分で約25 cmである。表層は開墾のために攪乱されていた。貝類には次の如き種類が見出された。

1. *Chione (Anamalodiscus) squamosa* (LINNÉ),
2. *Katelsia (Hemitapes) virginea* (LINNÉ),
3. *Crassostrea gigas* (THUNBERG),
4. *Anadara cornea* (REEVE),
5. *Gafrarium tumidum* RÖDING,
6. *Circe scripta stutzeri* (DONOVAN),
7. *Meretrix meretrix* (LINNÉ),
8. *Pitar (Pitarina) sulfura* PILSBRY,
9. *Geloina fissidens* (PILSBRY),
10. *Chione (Clausinella) isabellina* (PHILIPPI),
11. *Nerita lineata* GMELIN,
12. *Polinices (Mammilla) melanosiomides* (QUOY & GAIMARD),
13. *Turritella terebra* (LINNÉ) var.,
14. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING),
15. *Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum* A. ADAMS,
16. *Cerithidea (Cerithideopsilla) cingulata* (GMELIN),
17. *Batillaria zonalis* (BRUGIÉRE),
18. *Telescopium telescopium* (LINNÉ),
19. *Hemifusus tuba* (GMELIN),
20. *Hambis (Harpago) chiragra* (LINNÉ),
21. *Anomalocardia impressa* (ANTON)

以上21種の中、*Chione (Anamalodiscus) squamosa* (LINNÉ) が甚だ多く、*Anadara cornea* (REEVE), *Gafrarium tumidum* RÖDING これに次ぎ、*Anomalocardia impressa* (ANTON), *Crassostrea gigas* (THUNBERG), *Circescripta stutzeri* (DONOVAN), *Meretrix meretrix* (LINNÉ), *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING) がこれに次ぎ、他は少い。

これらの貝塚を含む遺跡からは有沢の黒陶、灰陶、赤褐色粗面(無文)土器、以外に、縄文を有する土器、格子目の印文土器も混在していた。以上の中、赤色系土器の中には良質磨研のものがあり、彩画を有するものが見られる。台湾本島における最初の彩陶の発見地である。石器は磨製品を主体とするが、打製品も見出される。犁形石器、無肩、有肩の石鋏、方角斧、有孔石鋏等を伴出す

(c) 覆鼎金貝塚

高雄市覆鼎金村の西北方に位置している。大小、数カ所に貝塚が見出された。坂口益雄氏の発見にかかるもので、1942~1943年にかけて数度にわたって踏査した。その最大のものは貝塚の露出している部分約35 m、貝層の厚さは30~40 cmと見られた。標高約8 m、海岸までの距離約6 km。

土器は赤褐色無文のものを主体とするが、*anadara* 属の貝の殻頂部を押捺して施文したものが見出された。灰色(無文)、黝色(無文)のものも伴出する。土環を多く伴う。注目すべきものに土製支脚がある。その様相は台南台地北端に位置する蔦松貝塚のそれに酷似している。筆者採集の貝類は次の如くである。

1. *Telescopium telescopium* (LINNÉ),
2. *Geloina fissidens* (PILSBRY),
3. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING),
4. *Crassostrea gigas* THUNBERG,
5. *Chione (Anamalodiscus) squamosa* (LINNÉ),
6. *Circe tumefacta* SOWERBY,
7. *Anadara (Tegillarca) nodifera* (V. MARTENS),
8. *Corbicula subsulcata* CLESSIN

(8) 鳳山丘陵南端の貝塚(鳳鼻頭貝塚)

鳳山丘陵の南端は15~20 m標高の扇状の台地をなしている。1943年夏、筆者が調査した当時、西から東にかけて、約100 mにわたって、先史遺物が散在していた。貝塚を伴う地点は等高線10~12.5 mのあたりを中心に6カ所にわたって見出されたが、顕著なものは2カ所、他に建業のために破壊された小貝塚があつ

た。最大のもは貝層の露出長約 20 m, 貝層の厚さはば 120 cm, これに次ぐものは貝層の露出層 15 m乃至 20m, 貝層の厚さはば 110 cm。海岸までの距離約 800 m。文化遺物の内容から見て, 桃仔園系の遺跡であることが明かであった。有沢黒陶, 赤褐色(粗面)無文土器, 良質の紅陶, 彩陶を伴っている。石器には石甌丁, 有孔石鏃, 戈形石器, 方角斧打製石鏃等を伴う。貝は綿密に採集しなかったが比較的眼についたものは, 1. *Gelcolina fissidens* (PILSBRY), 2. *Gafrcrium tumidium* RÖDING, 3. *Circe tumefacta* SOWERBY, 4. *Chione (Anomalodiscus) squamosa* (LINNÉ), 5. *Crassostrea gigas* THUNBERG, 6. *Terebralia semistriata* (BOLTEN : RÖDING), 7. *Telescopium telescopium* (LINNÉ) 等であった。

下淡水溪以南の状況は調査不十分で不明である。

V 東海岸の貝塚

東海岸における調査は非常に不十分であるために明確な状況は不明であるというより他はない, 然しながら, 東海岸は砂泥質の遠浅の海にめぐまれた西海岸に比して, 険わしく, 断崖をなす所が多い。海図によって等深線を見ると, 1,000 m 海深の線は非常に海岸に接近している。卑南大溪や秀姑巒溪, 花蓮溪の如き大河の河口附近に貝類の生産地帯が見出されるのではなかろうかと思われるが, 他の岩礁性水辺では, 岩礁性の貝類は得られるとしても, 採集が困難であるために, 西海岸における如き豊富な貝塚の形成は困難であろうと考えられる。

然し貝塚を伴う遺跡は皆無ではないと思われる。鳥居龍藏博士によると, 猴仔山から加路暖に近づかんとする所, 海岸を去る 5~6 丁の丘上の遺跡に貝殻の破片が散布しているという¹⁷⁾。かかる貝殻を伴う遺跡は加路暖湾の砂丘, 加路暖社の Parangan (会議所) のある地附近にも見られたという。鳥居博士の報告にある加路暖は現在では加路蘭なる字であてている。この地方は卑南大溪の河口に近いので, 河口附近において貝類の生産地帯を伴っているものであろう。残念ながら如何なる貝の品種が得られたが不明である。筆者自身未踏査の遺跡である。

VI 澎湖島の貝塚

台湾本島外において貝塚が見られるかどうかは問題である。火烧島, 紅頭嶼においては深海に囲まれた岩礁性の海岸をもつことから見て, 貝塚の発見は困難であろうと考えている。然し台湾海峡中の澎湖島には貝塚がある。

澎湖本島の良文港における化石層と思われる広大な貝の堆積層中に食用されたと見られる貝の包含が見られ, その貝層中から繩蓆文を有する土器—台南台地の牛欄子遺跡出土の土器に酷似する土器—および石器がえられた。貝の品種はの如くである。

1. *Barviatia* (SOLANDER), 2. *Peteria* sp., 3. *Lima sowerbyi* DESHEYES, 4. *Circe tumefacta* SOWERBY, 5. *Meretrix petechialis* (LAMARCK), 6. *Tapes platyptycha* PILSBRY,
7. *Cacella chinensis* DESHAYES, 8. *Patelloia concinna* (LISHKE), 9. *Cellana* sp.,
10. *Haliotis japonica* REEVE, 11. *Tegula (Chlorostoma) stenogyrus* FISCHER, 12. *Lunella coronata granata* (GMELIN), 13. *Nerita albicilla* LINNÉ, 14. *Nerita striata* BURROW,
15. *Baillaria bornii* (SOWERBY), 16. *Strombus (strombus) issabella* LAMARCK,
17. *Erosaria (Ornamentaria) annulus* (LINNÉ), 18. *Monetaria trapezium* (LINNÉ),
19. *Fassialaria (Pleurplocia) trapezium* (LINNÉ), 20. *Catharus (POLLIA) fumosus* (DILWYN), 21. *Conus* sp., 22. *Bradybaena (Acusta) toyenmougaiensis* (BOLLE)

筆者が1968年8月台湾を去ってから後, 台湾大学地質学教室の林朝榮教授によって澎湖島において多数の貝塚が発見されたこと, 台湾大学考古人類学教室の宋文薫講師から教示を受けた。それらの中には宋代の青磁を含むものもあるということが詳細は不明である。

三

以上台湾先史時代の貝塚について概観してきた。本稿は将来台湾先史時代を考える上の基礎的な作業の一をなすものである。貝塚は海岸線と深い関係をもつが故に、海岸線との関係において詳細な考察を更に必要とするかと思う。貝塚時代の海岸線を貝塚の分布を通して想定して見る作業も行なうべきであると考えているが、他日に遺してしまった。貝塚には食用された貝のみでなく、他の動物遺物も含まれている。食料獲得の技術を考え、その技術との深い関係をもつ生活を考えるという方向にこの報告の内容を拡大することも必要であろう。それら重要な問題に対する作業を他日に期せざるを得ないことを遺憾に思うものである。

貝類の同定は文献によったもの以外はほとんど金子寿衛男講師（台大）に仰いだ。明記して深い感謝を捧げたいと思う。筆者は金子寿衛男講師が第二次大戦中、応召される直前に台湾先史時代貝塚に関する報告を書かれたことを知っている。金子氏はその報告を当時台大教授であられた早坂一郎博士に遺されて出征された。早坂博士は筆者に文化遺物に関する面に於いて附記すべきものなきやとはかられた。筆者は当時筆者の及ぶ限りの所見に立って若干の加筆をなしたことを記憶している。然しその後、筆者もまたすべての研究をすてて従軍した。金子講師の重要な論考がその後刊行されたかどうかは知らない。最も少壮有望な貝類学者であり、考古学研究者であった金子寿衛男講師の業績について筆者は忘れることができない。もし金子氏に連絡がとれたならこの報告はもっと有力なものとなりえたと思うが、それができなかったことを深く遺憾としている。

追記——この報告は終戦後（1945～1948年）台湾大学文学院考古人類学教室において「台湾先史時代概説」を講義した際のノートによって、作成したものである。この報告印刷申即ち1962年2月26日、国立台湾大学考古人類学刊第15—16期合刊号の寄贈を受けた。同紀要中に台湾大学教授林朝燦氏の「台湾西南部之貝塚與其地史学意義」なる論考を見出した。筆者が台湾大学に遺してきた標品、筆者の講義ノートまで参照せられた入念な論考であった。従って、筆者印刷中の報告と重複する所もあるが、筆者の報告は台湾全域の貝塚をとりあげているのと、また西南部貝塚中には林教授の言及されなかった貝塚で既に消滅してしまった重要なものもあるので尚この報告を刊出する意義があると思うものである。

文 献

- 1) 早坂 一郎, 地形及地質に現われたる台湾島近代地史概観. 台湾博物学会会報, 19/101.
- 2) 原田 正彦, 台湾円山貝塚の石器. 人類学雑誌, 15/169.
- 3) 佐藤 伝蔵, 台湾台北附近の石器時代遺跡. 人類学雑誌, 15/179.
- 4) 宮原 敦, 台湾台北円山に於ける巨大なる砥石竝に貝塚に就いて. 人類学雑誌, 34/4.
- 5) 丹 啓之助, *Corbicula maxima* PRIME の現生標本と貝塚標本として現われた変異に就いて. ヴェキナス, 4/5.
- 6) 丹 啓之助・黒田徳米・宮本延人, 台北郊外宮ノ下貝塚. 科学の台湾, 2/2.
- 7) 早坂 一郎・林 朝燦, 台湾地学記事, 5/9-10.
- 8) 宮本 延人, 台北州西靈岩石器時代遺跡調査予報. 南方土俗, 5/3-4.
- 9) 丹 啓之助, 台北盆地の地質学的考察. 矢部教授還暦記念論文集, 1939.
- 10) 金子寿衛男, 新竹州竹南郡後龍底貝塚について. 科学の台湾, 11/1.
- 11) 丹 啓之助, 新竹州苑裡に発見された貝塚の貝類(予報), 台湾地学記事, 7/5-6.
- 12) 劉 茂源, 苑裏貝塚曠穀屯雜記. 苑中校刊, 創刊号.
- 13) 石 璋如・宋 文薰, 鉄砧山史前遺址試掘報告. 国立台湾大学考古人類学刊, 第八期.
- 14) 宋 文薰・張 光直, 台中県水尾溪畔史前遺址試掘報告. 国立台湾大学考古人類学刊, 第三期.

- 15) 早坂 一郎・林 朝榮, 台湾考古資料. 台湾地学記事, 5/1.
- 16) 国分 直一・金子寿衛男, 台南台地に於ける先史文化遺跡に就いて, 第一報 台南周辺部に於ける遺跡及遺物. 考古学, 11/1C.
- 17) 鳥居 龍蔵, 東部台湾阿眉族の土器製造について. 人類学雑誌, 12/135.